

---

# 東方幻実神

Erius

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方幻実神

### 【Nコード】

N0414Z

### 【作者名】

E r i u s

### 【あらすじ】

交通事故で死んだ主人公。しかし、その魂は創造神の元に。ありきたりなことで独自設定が多いかと思うので、苦手な方は逃げてください。／／現在総書き直し作業中です。話の根本を変えたつもりはありませんが、大分別の話になってるので注意。

## 第一話：世界神の誕生（前書き）

皆さん始めまして。

簡単にですが、いくつか注意をば。

まず、この作品はもともとオリジナル作品の予定だったことです。要するに、独自設定がすごいです。

次に、これが初作品です。一応書き直しではありますが、初作品です。

多少の粗末な文章、意味不明な点は見逃してくださるとありがたいです。

では、どうぞ。一話でも読んでくださればありがたいです。

## 第一話：世界神の誕生

不運にも交通事故で亡くなった一人の男がいた。

特に出来ないこともなく、しかし完璧にできる物は無い、平均的な男だった。

彼の魂は偶然か必然か、幸か不幸か、世界を司る創造神の元へ流れ着いた。

これは、そんな彼の非常識に満ち溢れる物語。

~~~~~

……ここは一体どこなのだろうか？

何もなく、真っ白の様でも真っ黒の様でもある不気味な空間だ。しかもよく考えれば、感覚が全く無い。

あるはずの腕、足、頭……どれも、無い様に感じる。

もしかして、本当に無くて、この光景も見えているわけではないのだろうか。

「おや……珍しいね」

声が聞こえるような気がする。あるかないか分からない今、全てが曖昧だ。

「なんだ……？」

俺が何か喋った気がする。

「喋れるのかい？」

「しゃべ……れる……？」

喋ったような……いや、喋った！

俺は今確実に喋った！

それを認識した時、全ての感覚が戻ってきた。

見えるし、動かせる！

俺の目には確かに自分が映り、目の前には男がいた。

周りは真っ白で何も無い。

「……驚いたよ、まさか魂なのに実体化するとはね」

ファンタジー物によく出る神のように白い衣装を纏っているその男は、驚いたようにそう言う。

「なあ、ここはどこだ？」

だが俺はそれを気にせず、思ったことを口にする。

……後から思えば、放心状態だったのだろう。

「……こんなのは初めてだよ。特別に、教えようかな」

そう言うのと一呼吸置き、説明し始めた。

「ここは連結空間、何もない場所だ。しかし、全ての世界はこの空間に繋がっている。

全てのために無くてはならない場所だよ。そして、創造神の僕の”仕事場”でもある」

「どういう意味だ？」

「僕の仕事は、君みたいな珍しくここに迷い込んできた魂をどうにかするのが一つ。

全ての世界を管理して、新しく創ったり消したりするのが一つだ。最も、君みたいなのはあんまりないから実質仕事は1つだけだね。」

「うーん……」

「ああ、全て理解しようとしなくていいさ。多分無理だからね。それに、もしかしたら後で理解できるかもしれないし」

意味が、よく分からない。

掴めたのは大まかなことだけだ。

「さて、これから選択をしてもらおう。

……喋れない魂しかいなかったからちゃんと選択させるのは初めてだよ。」

「選択？」

「そうだ。……君には、2つの選択肢がある。  
まず一つ、このまま本来行くべきだった場所へ行く。君たちはあの世って言ったっけ？」

もう一つ、新しく創った世界の神を務める。丁度今創ろうとして  
いるところだよ。

正直に言えば、人手不足なんだよね。いくら世界が増えても、管理できるのは僕だけだからね」

「……創らなければいいんじゃない？」

「残念ながらそうも行かないのさ。確かに、誰かに命令されてるわけでもなければ、  
強制的に創らされてるわけでもない。でも、やらなきゃいけないんだよ。”そうなってる”からね」

「……わからん」

「まあ、そんな話は置いといて。選択を頼むよ」

ぶっちゃけ、こんな選択肢出されたら選ぶの決まってると思うんだ  
よな。

もちろん……

「その選択肢なら、俺は後者を選ぶ」

「……うん、わかった。準備を始めるから、ちょっと待っててくれ」

俺は座って待つことにする。

ところで……何故俺はこんな状況でありながら考えられるんだ？  
普通なら考えるのをやめてもおかしくない状況なのに。

死んだから？関係ないだろう。そんなことは微塵も考えていなかった。

まあ、考えて分かるようなことでも無さそうだし……

「……よし、これで終わりだ」

向こうも終わったみたいだし。

「ああそうそう、君にはこの本を渡しておく。役に立たないことは無いと思うから。」

……それじゃあ、あそこへ行ってくれ」

「ここか？」

「そこでいい。……最後に、名前を聞いてもいいかい？」

「おつじょうじゆんじ応条順時だ。どうせもう使わないと思うがな……」

「それじゃあ、ありがとう、おつじょうじゆんじ応条順時。生憎僕には名前が無いんだけれどね。」

またいつか会えたらうれしい」

「そうかい」

そうこう言っているうちに、俺は光に包まれ始めた。

正直なところ、これからどうなるのかさっぱりわからないし、こいつの言ったこともよく分からない。



だけどもあ……

「できるだけ、楽しむとしますかね」

そう言い残し、俺は消えた。

さて……どうするかなあ。

周りは木一つ無い果てしない草原。地面が無ければ、さっきの場所とあんまり変わらないな……

そもそも、俺はどうすればいいのだろうか。  
確か世界の神とか言われた気がするが……

ん？……ふむ。

適当な場所に移動、地面を引っ張るイメージで……

「それっ！」

ドゴォン！

「うぐっ」

な、なんだ……力が入らな……

起きると、朝だった。

”今は太陽が沈んで出てきた時”と頭に浮かぶので、多分一日経ったのだろう。

しかし、昨日のはなんだったのだろうか？

本能的にと言うか、感覚でやったただけなのだが……

目の前に馬鹿でかい山が出来てるし。

うーん……ああそうだ、本。

基礎的なことぐらいは、書いてあるだろう。

能力について

この世界で能力とは、人によって持っていたり持っていなかったりする固有の物だよ。

世界の頂点に位置する君なら確実に持つてるとは思うけどね。それもすごい物を。

とりあえず、目を瞑って能力と念じればいい。名前だけは分かるから。

何が出来るか、やりたいことをイメージしつつ力を込めればいい。手なんかを使つてやるとイメージしやすいと思う。

最初のページ。こんな物もあるのか……完全にファンタジーだな。今の俺の存在が既にファンタジーだから今更だけど。

目を瞑って……集中。

『現実と幻想を操る程度の能力』

…… 本当に名前しか分からないn  
いや、待て。この感覚は、さっきのと似てるな……  
もしかして、この山も能力で創ったのか？  
…… 神っぽく何でもできる物だったりして。ただし、力は半端なく  
使うとか。

いろいろ試した結果、その通りだった。力を半端無く使うことまで  
含めて。  
5つ試そうと思って7日もかかるとは思わなかった。  
とりあえず、読書しよう。もう倒れるのは嫌だ……

無事読破。ただし1日ぶつ通しで。やっぱり夜って暗いんだな。  
さて、力について確認してみよう。  
さっきまで力と言ってはきたけど結局なんだかわかってないし。

目を瞑って集中。今度は力をイメージする。  
…… 白い何かと紫の何かがあるようだ。

具体的に何とはわからないが、取りあえず二つ持っているようだ。  
これ以上のことは書いてなかった。自分で考えろと。当たり前か。

普通の腕力とかと混ざって紛らわしいからこっちはこれから気とで  
も呼ぼうか。

正式名称を俺が決めれば早いんだが適当につけるのもいやだしな。

そういえば、俺以外に誰もいないのだろうか？

世界の始まりだし居なくてもおかしくはないが、世界が違うからといって特別に何か違うことはないらしい。

つまり、日本神話とかが実在する可能性も無いわけではない。

最も、神話なんぞほとんど知らないのだが……

まあ、暇になったら何かしてみよう。

後は、取りあえず住処だな。草の床で寝るのも慣れてきたが、やっぱり何か欲しい。

とは言っても、何もないのだが……　つと、そういえば目の前に山があったな。

穴でもぶち開けて住むか。力も人間だったときに比べて物凄い強くなってるみたいだし。

ってことで。

「そいつ！」

ドコッ！

……ふむ。確かにこれは強い。人が入れる程度の洞穴が作れるとしても、よく考えたら置く物ないな。木があればいいのだが……

しょうがない、創るか。

木を一本創りだす。何の木かは分からないが、繁殖してもらおう。その時間さえ耐えれば、何とかなる。その間気についていろいろやってみるか。

## 第一話：世界神の誕生（後書き）

言葉にかなり悩みました……もっというんな言葉知らないと駄目で  
すね、はい。

一行書くのに10分悩むとありました。これはまずい。

## 第二話：話し相手を求めた一億年目（前書き）

日本神話入りします。一億年ぶっ飛ばします。原作キャラ出ます。

## 第二話：話し相手を求めた一億年目

木を創りだしてからおよそ100年経った。

木は20本程になった。早いのか遅いのかわからないが……

寿命が無いも同然だからだろうか。この100年は長いようにも短いようにも感じる。

もう人じゃないなあと今更なことを考えながら、修行する。

修行とは、気と能力の修行だ。

気は使えば増える。使い方も分かってきた。

能力は使えば慣れる。ただし、気を使うので増えないと倒れるのは仕方ない。

今はまだ増やすときだろうが、もう少ししたら頭に浮かんでいる気の使い方をやってみようと思う。

……とは言うものの、ずっと同じことをやっているので暇になる。なので、前に言ったように誰か居ないか探しに行こう。

やはり100年程度ではほとんど変わらない。いつの間にか山の近くに湖が出来ていたときは驚いたが、と、歩いていたところで。

「貴方は誰？」

いつの間にか後ろに誰かいた。

「……俺は……」

応条順時と言いかけて、止める。

これは前の世界での名前だ。

「刃勇流英だ」

なので、ふっと頭に浮かんだ名前を言う。

「そう。私はアマテラス。ここ高天原を治めているのよ」

アマテラス、と言うと……

「天照大御神？」

「そうとも呼ばれてるわね。貴方は何をしにきたの？」

「探索だ。俺はあっちの方に住んでるんだが、誰も居ないからな。暇なんだ」

「そうなの。でも、ここも私以外誰もいないから暇な物よ？」

「俺としては話せただけでうれしいよ」

……ん？

「おい、誰か来るぞ？」

「……ッ、まさか」

遠くに、誰かがこちらに向かって歩いてるのが見える。

「ここを奪いにきたのかしら？だとしたら……」



「いや、待て。敵意は無さそうだぞ？」

だんだん近づいてきているが、敵意を全く感じない。

「何か構えてるわけでもないし……」

「……本当ね。治めるっていう言葉を重く感じていたのかしらね」

そういうことで警戒をやめ、待つ。  
やがて目の前に来ると……

「あら、スサノオじゃないの」

「やあ、アマテラス。そちらの方は？」

「刃勇流英だ」

「この人はさっき来たのよ」

「そうか」

と、こっちに来て微笑みつつ。

「初めまして、僕はスサノオと言う。アマテラスとは兄妹だ。僕が弟だけだね。

もう一人、ツクヨミって言う兄が居るんだけど……どこに居るか分からないんだ」

「ああ」

全部どこかで聞いたような名前だな……まあいいか。

「さて……僕はもう行くとするかな。ここに来たのは挨拶するためだし」

「あら、遠い所にも行くのかしら？」

「ご名答。どことは言わないけどね。それじゃあ」

そう言い、スサノオは去っていった。

「さて、俺も帰ろうかな。こうして話したのは久しぶりだ」

「一気に寂しくなるわね」

「何を言うか。この時代で、何人も一緒に居る事自体が珍しいんだよ？」

「まあ、それもそうね。また会いましょう」

「ああ」

微笑むアマテラスに見送られつつ、俺は帰っていった。

ということに着いた我が家。

隅には100年分の日記がある。

紙……というか白紙の本は、能力で創らせてもらった。修行目的に。この能力は便利すぎるのであまり利用したくないのが本音だが、

本なんぞ今から何年後に出来るかわかったものじゃない、  
ということでは仕方なく。言い訳にしかないが。

さて寝よう、いつの間にか日が暮れている。

能力の安定はいつのことやら。明日も明後日も、修行だな。

気がつけば1億年。果てしないと思っていても、意外とすぐに過ぎ  
る物だな……

もちろん変化は大量にある。

作り出した木は枯れることなく成長し続け、大木になった。

しかも、そこから広がっていった木々は森と言っても良いぐらいに  
広がった。

火山が噴火したりして地形に凸凹ができたし、どこからか水が出て  
きて川もできた。

人間どころか猿も居ないが、かなりの変化があった。

悲しいのは、相変わらず話す相手が居ないことが。

もちろん俺自身にも変化はある。

気は増加したし能力も少しは安定してきたが、

一番は『術式』を開発できたことだ。

最初にアマテラスに会った年の10年後ぐらいから開発に取り掛か  
っていたのだが……

なんとか完成した。あとは、修行して安定させるのみだ。

この術式は気を精密に操って式を作り、何らかの効果をもたせるこ  
とができる物だ。

式なので複雑な物は相当に精密で複雑になるが、その代わり成功す

れば安定する。

うまくやれば単純に気を使ってやるより消費が減るし、効率もよくなる。

もちろん難点は、難しさなのだが。

そういえばあの後分かったのだが、アマテラスが居た高天原は天界と呼ばれるところにあっただけ。

で、俺が通ってきた道は天界と地上を繋ぐ道だったらしい。

偶然にも程があるだろう……

さて、これから神社を建てようと思う。

何時までも洞穴はなんだか悲しいし、個人的に神って言うത്神社だし。

100年ほど前から計画はしていたので、準備は万端だ。

場所は、湖の近くだ。とは言っても山の近くの湖ではなく、別の場所の湖だ。

理由はいろいろあるのだが……今はいい。

建設完了！特に何も起こらなかったなので過程は割愛する。

本殿から鳥居まで建てておいた。人がいない今意味はないけど。

朽ちないように保護の術式をかけてあるので、人が出る頃までもつてくれるとありがたいのだが……

荷物は日記のみ洞穴に置いてきた。封印付きで。

ぶっちゃけ、多すぎるのだ。圧縮の術式をかけても一部屋潰す程度にはある。

止める気はないが。書かないつもりでも無意識に書く程度には慣れてしまったからな。

封印かけたのは、無くしてしまうのは惜しいからだ。

術式のテストも兼ねているが。だめなら、いずれ封印が自然消滅するか誰かに解かれるだろう。

出かけようか……と思ったが、日が暮れてきたので明日にしよう。

とまあ翌日。朝飯食ってさっさと行こうそうしよう。気になって仕方が無いのだ。

今更だが、生活自体は人間の頃とほとんど変えなくて過ごしている。世界になんかあったりすると全力で取り掛かるので全然変わるが。

さて、やってきたのは山の近くの湖。神社の近くじゃない方。結構気になることがあるのだが、何となく来れないでいたのだ。気になることは、山に居てもわかるぐらいの強さの気を感じるのが一番大きい。

さて……何が出るのやら。

湖に近づいていくと、途端に何故か霧が深くなってきた。ふむ……まあ、この程度なら見えないことも無い。

……と、なにやら人影が見えるが……

「誰か居るのか？」

呼ぶように言うと、驚いたようにビクッとした後、

「誰だ！ここはあたいの湖だよ！」

と言った。

明らかに敵意を向けられているな……

「落ち着け、俺は怪しい者じゃない。とりあえず霧を晴らしてくれ、見えない」

「見えないのは仕方ないわね……特別に晴らしてあげるわ!」

さあつと霧が晴れていき……

少女が現れた。

「妖精か……ん？妖精？」

妖精にしては、気の量が物凄く多い気がする。

その辺の森でも時々見かけるが、ここまで大きいのは見たことが無い。

「ぐつ、何と言われようがあたいは妖精よ!」

若干涙目になりつつ大声で言われた。一体何が……

「お、落ち着いてチルノちゃん？」

また何か現れた。やはり妖精のようだ。

こちらはこちらでなかなか強いな……

状況が把握できないのだが……何があったのだろうか？

「なあ、何が……」

「ああ、すいませんそこの方。

チルノちゃんの前で妖精に関しての話は控えてもらえるとありがたいです……」

申し訳無さそうに頭を下げて言ってくる。

まあ、事情があるなら仕方がない。断る理由があるわけでもないしな。

「……ああ、わかった」

少し様子を伺っていると、やがてチルノと呼ばれた妖精が立ち直ったようだ。  
そして……

「お前、結局何しに来たんだ？」

「何があるか見に来ただけだ」

「じゃあたいと勝負しなさい！」

「は？」

前後の文が繋がってない気が……

「この状況で平然としてられるってことは強いんでしょう？あたいは最強になるんだから！」

うん、わからん。妖精の括りで言えば十分最強なのだが……  
まあ、深く考えずに相手をしようか。

「わかった、いいだろう！かかってこい！」

さて、がんばろうかな……



## 第二話：話し相手を求めた一億年目（後書き）

アマテラスはいつかまた出てきます。多分。  
スサノオも出てくるかも。

### 第三話：実戦経験なんてありません（前書き）

タイトル通り。先に言っておきますと、結構無理矢理に展開を引っ張りました。

### 第三話：実戦経験なんてありません

ふむ……

よく考えてみれば、俺は今武器なんぞ持つちやいない。

ついでに、力と気はあるけれども実戦経験も無いに等しい。

拳句、チルノは強い気を放っている。

あれ、負けてもおかしくないよなこれ……

チルノは氷を固めた棒……いびつだが剣か？それを構えている。  
対して、俺は素手だ。

能力を使ってもいいのだが、あまり時代に合わないものは出したくない。消費も激しいし。

「いくわよ！」

そのかけ声と同時に、氷は俺の目の前まで来ていた。

……速い！

「チツ……せいつ！」

受け流しつつ、カウンターを入れる。

「ぐっ」

だが、その勢いで何回も斬りつけて来る。防ぎきるのは不可能だ。  
どちらかと言うと殴られているのでスパッと切れたりしないのが幸  
いだが。

……打撃ならいけるか？

「……………これだっ！」

ガンッ

「あっ」

手に気を込め、氷の剣を殴って弾き飛ばした。  
この隙を逃すほど馬鹿ではない。

「今度はこっちの番だ！」

武術の心得はないので適当になっってしまうが、殴る。  
回し蹴りからの回し蹴り。浮いたところに滑り込み殴り上げる。  
後は……

「っ……………これ以上させるか！凍れ！」

ガキン！

蹴りは、突然現れた氷により防がれる。

チルノはその隙に距離をとり、気を集めて……

「食らえ！パーフェクトフリーズ！」

すると、チルノから弾幕が放たれる。  
そして……弾幕が止まる。

「……………？」

「今だ！アイシクルマシンガン！」

と、弾幕が動くと同時につららが凄い速さで迫る。

「っ……なかなかきついな……」

気を集めて盾にし、ダメ押しで即席術式結界を貼る。  
弾幕は弾かれていくが、即席結界も壊れていく。

「まだ試してないけど……仕方ない」

俺は盾とは別に手に気を集め、形を形成し放つ。  
白のその弾丸は、いくつもゆっくりと進む。

「相殺弾丸！」

速度の遅いその弾丸は、チルノの弾丸やつららに当たると同時に消し去った。

「何！？」

「終わらせるぞ！」

突破口を作り、チルノへ殴りをかます。

「ぐうつ」

「破壊の拳！」

ある程度破壊に特化した術式を拳にかけ、もう一発入れる。

「まだだよっ……」

チルノは氷を創りだし、抵抗する。

だが、破壊に特化したこれを防ぐには力不足だった。

バキッ！

「がっ……」

チルノは吹っ飛んでいった。おそらく、もう戦闘不能だろう。

吹っ飛んだところでは、チルノが泣いていた。さっきのもう一人の緑髪の妖精もいた。

チルノの近くにしゃがみこむ。妖精は何も言わなかった。

チルノは何か言っているが、正直なところさっぱりわからない。

「……チルノちゃんは」

と、そこまで黙っていた妖精が口を開く。

「チルノちゃんは、群れから追い出されたんです」

「……へ？」

「もともと私達妖精は、非力で無知です。でも、チルノちゃんはそ

のどちらもあった。

単純な思考の妖精が取る行動は簡単でした。追い出すことです。お前は妖精などではない、と、何度も……っ」

この事実、俺は黙っていることしか出来ない。

こんな状況で、なんて声をかけたらいいのか、俺には分からない。

やがてまた話し始めた。

追い出された彼女は、力を求めた。

それは追い出した奴らに向けるための物ではなく、単純に最強を目指すため。

なぜそう思い至ったのか分からないが、妖精として生きること捨ててまで目指そうとした。

しかし、妖精だと言い張ることは絶対に諦めなかった。彼女なりのプライドがあったのだろう。

緑髪……大妖精と言うらしい。

彼女にもチルノの行動原理と考え方はほとんど分からないが、支えになりたいということに付いていつてるようだ。

「……今更だけどさ、俺みたいな見知らぬ奴にそんな事言っちゃっていいのか？」

「いいんですよ。ただの自己満足ですけどね。事情を知られて困ることもないですし」

ああなるほど、妖精を、群れを捨ててまで得ようとした『最強』を俺がへし折ったのか。

ならば、責任を取らなくてはな……

「なあチルノ」

「……なによ」

「俺の修行に付き合わないか？」

「……え？」

要するに、俺は不可抗力とはいえ彼女の上に立ってしまったわけ。ならば、手伝うぐらいはしなければならぬだろう。

「まともに戦いをしたことの無い俺。でもその俺は勝ってしまった。別に俺はお前に、俺が最強だと言いに来たわけじゃないのにな」

「……やるわ」

「……ああ、わかった。いつか俺を、超えて見せてくれ」

チルノは俺の修行に付き合うの決定。  
後は……

「大妖精、お前は どうするんだ？」

「ついていくに決まってるじゃないですか。私はチルノちゃんを支え続けるって決めたんですから」

「……ああ、そうだ。ここを離れられるのか？妖精は離れられないと聞いたが……」



「私達を縛るものは、持った力で消えました。ですので、どこへでもいけます」

「なるほどな……じゃあ最後に、お前達は、妖精でいたいかな？」

「もちろん」

「じゃあ、ちょっと待っててな」

根本的にいろいろするのは俺じゃ力不足だ。だが、力を抑えることぐらいはできる。

2つのリボンに、複雑に術式を書き込んでいく。こういう時は能力に感謝したくなるな……

「……よしできた。頭にこれをつけな」

素直に、付け始める。チルノには青いリボン、大妖精には黄色いリボンを渡した。

と、みるみる力が抑えられて減っていく。

「俺の力じゃこの程度しか出来ないけどな……力ぐらいは、妖精になれてるんじゃないかな？」

「ありがとう！……でもこれじゃあ最強を目指せないよ？」

「外せばいい。でも、基本的につけていれば、少なくとも妖精に見えるさ。若干身長も縮んでるぞ？」

「え？……あ、たしかにあんたが大きく見える」

「まあ、それじゃあ家に帰るとしよう……っと、忘れてた」

自己紹介をしていない。

「俺は刃勇流英、ただの神だよ」

「いやしかし疲れたな……」

3人で家に帰ってきた。話し相手がいるってこんなに素晴らしいことなんだなと思ったりもした。

「おい、部屋は有り余ってるから好きな部屋使っていいぞー」

畳の上で転がりまわってる2人に声をかける。

建設の時、必要な場所以外は全て空き部屋にしたので有り余っているのだ。

何部屋か日記の保管場所にして潰しているが、それでも5部屋以上はある。

ここは宿か。神社だよ。

翌日。あの後、もう暗かったので寝た。木炭に術式をかけて、それに火をつけたものぐらしか光源がない。

ろうそくでもあるといいんだがな……まあ、それはどうでもいい。

それより朝食だ。もちろん俺が作る。

「なにやってるの〜?」

と、おいに誘われたのかチルノが来る。

「朝食作ってるんだ。大妖精はどうした？」

「いろんな場所見て回ってたよ」

「そうか。まあ、そのうち来るだろう。……っと、もうそろそろで  
きるぞ」

献立はご飯に焼き魚、味噌汁だ。

味噌だけ自分で出したが、それ以外は全て自分で取ってきた物だ。  
全部今の物だけでやろうとするとただでさえ単調なのが余計にひど  
くなる。

許してほしい。

木を削って作ったちやぶ台に配膳し終えた頃、大妖精が釣られたよ  
うにやってきた。

「……あ、そういえばお前達箸なんて知らないか」

と、ここで重大なことに気がつく。今更である。

何とか教え、こんどこそ……

「「「いただきます」」」

### 第三話：実戦経験なんてありません（後書き）

チルノの理由が全然思いつかず、散々悩んだ挙句こんな出来に。  
いつかいいのと思いつけば、編集しようと思います。

取りあえず今は最後のあたりがやりたかっただけと思ってください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0414z/>

---

東方幻実神

2011年12月1日18時52分発行